

第三章 中国近代アナキズム

(1) 日本在住アナキスト——民族主義対アナキズム——

中国の近代アナキズム運動は、すでに触れたごとく清末に始まっている。しかしその源泉地は清国内にある筈もなく、西と東、パリと東京の二箇所にあった。あと数年の運命にある清王朝は、さすがに改革の要を認めて、日本とヨーロッパに大量に留学生を送ったが、その溜り場が東京とパリであったせいである。一九〇六年までに日本には一万人以上、ヨーロッパには五、六百人の清国留学生がいたといわれる。しかもそれらは必ずしも中央政府、地方政府の息のかかった学生が送られていたわけではなく、むしろ反対に反清分子の厄介払いという意味が濃かったため、必然的にパリと東京は、革命とアナキズムの温床になってしまったのである。

東京とバリのうち、主流をなしていたのは、やはりアナキズムの本場バリであった。国内ではより急進分子を、故国を遠く離れたバリに送るようにはしていなかったのである。

東京では戊戌政変（一八九八）以来の亡命客康有為・梁啓超・章炳麟・孫文等の熱烈な反滿革命の地盤があつたし、直接的には幸徳秋水の思想感化が大きいのである。渡米中、自分の今までの認識を超える過激な社会主義を知った幸徳は、帰国（一九〇六）するや、「平民新聞」に「余が思想の変化」として、「かの普通選挙や議會政策では真個の社会的革命を成遂げることとはとうていできぬ。社会主義の目的を達するには、一に団結せる労働者の直接行動によるの外はない」、とセネストによる革命という反議會主義の立場を鮮明にしていた。それは事実上アナキズム宣言に等しかった。

中国人と東京アナキストの両者の具体的な接触については、例えば『留日回顧——一中国アナキストの半生』の景梅九などが詳しく描いている。景梅九は一九〇七年に東京・錦輝館での「革命の大人物」幸徳秋水先生の社会主義演説を聞いて、一ぺんに惚れ込んでしまうのである。出国以前から急進派であるが、幸徳に接して以来、急速にアナキズムに傾いてゆく。ある日、某所の二階で秘密会合を開いていると、そこへ警察に踏み込まれた。みんな階下へ追出されたが、彼だけは相手にせず、大杉栄先生に世界語を教わって、一所懸命に発音の訂正を受け

ていた。日本の同志は振り返って驚いて笑いながら、「この騒ぎにまだ勉強しているのかね。呑気だ、呑気だ」といっていたという。

東京・アナキストの中心人物は、章炳麟をアナキストと呼ぶには、いささか無理があるとすれば、パリ・グループとも深いつながりがあつた張継（一八八二—一九四七）、国学者で、章炳麟の同志でもあつた劉師培（一八八四—一九一九）とその妻何震の三人が挙げられよう。彼らはいずれも景梅九と似たようなケースを辿って、アナキズムを標榜するようになった。張継はもっとも初期（一八九九）の留日学生であるが、劉夫妻など一九〇七年に来日して、章とのつながりがあるとはいえ（初め同居していた）、僅か数カ月のうちにアナキストになっている。章が「民報」の主筆をしている間は、劉師培は数々の論文を掲載し、傍らアナキズム雑誌「天義報」（六月創刊）を発行していた。

この「天義報」で興味深いのは、第六号に、劉夫妻と張継が「社会主義講習会」なるものを計画して、その第一回の開会の折の劉光漢（師培）の演説要旨を載せていることである。ここで彼は中国における無政府実現の可能性について、世界でもっとも容易であると述べているのである。

「中国の政治は、放任を重んじ干渉を重んじない。名は専制といいながら、実は人民に親し

まず、人民は官吏を信頼せず、法律は空文に過ぎず、官吏は空位に等しい。一人として真に権力を持つ者はなく、真に法を遵守する者もない。……それ故に世界の無政府の実現は、中国がもっとも容易であり、中国が最初となるに違いない。」

それは現在にしてなお、可能性として残されている筈のものである。確かに半面の真理を含んだ意見と思われる。

しかし総体として劉師培の古典に託しての説は、空想的、解說的、翻訳的であり、原創造性に乏しいのである。生存中の知己である孫伯醇の回顧談によると、劉師培という人は性的不能者であり、「天義報」も奥さんの方が主で、彼はほとんど関係なかった。学問については三代つづく『左氏伝』の専門家で、アナキズムは何も知っていない。「かれは要するに世間知らずですね。民報社でね、夫婦げんかすると、道ばたのミソにつつまれて、そこでアーンアーン泣くんです、劉師培のほうが」(『中国』一九六六・五)といっている。

もっとも現実不適応者という点では、章炳麟の方がもっと極端であって、靴の左右もわからない。「ヘー、靴に右と左あるのかね」といいながら左右反対にはいてしまう。外出する時は必ず誰かがついてゆく。家がわからなくなってしまうからである。ハナは袖でふいてしまふ、風呂に入れば底を抜かしてしまふ。「あれは普通の人からいうと、気狂いというような人

です」(同前)ということである。

これはあえて劉師培、章炳麟に止まらず、中国読書人階級全体を象徴しているものであろう。それだけ中国知識人というものは、民衆の現実生活から浮き上がっていたのである。しかしそこに中国人の特性としての、頑固さ、非妥協性があり、チャラチャラと容易に新しいものに飛びつこうとしない主体性が見えている。漢民族は、しばしば異民族王朝を迎えたといえども、結局は自己の文化圏に彼らを吸収して、同時に自己も生き延びてきた民族である。それだけ柔軟かつ強靱な心性を持つのが中国人である。近代西欧吸収期にあっても同じで、ここでは日本のような西洋衝撃はなかったとみていい。彼らにしてみれば、西欧人の発明発見とするものは何でも、自国の古代にあるので、改めて焼き直しすればそれでよかった。

彼らにいわせると火薬や印刷機や、化学や数学はもともと中国の発見に関わるものである。まして思想の萌芽に至っては、中国には何でも揃っているのだ、ないものはない。事実、日本の和魂洋才のような実体のないものと違って、古代に諸子百家のような巨大な百科全書派を持った彼らとすれば、そう考えるのも無理はないのである。そのようにして、康有為も章炳麟も、劉師培も、自分の新(?)理論をつくりあげてきた。日本人のように対象を枠のままに受取らず、何でもかんでも自国の言葉に翻案して再発表するやり方、それは中国人の伝統的

思考法である。それ故に当人たちは合理的な意図をこめて「中体西用論」（中国が主で、西欧は用）を云々したり、周りからはどうにもならないの意味を含んで「中華思想」があげつらわれたりするのである。（景梅九のような人でも、中体西用論を邪説としながら、やはり孟子の一説を引いて、これこそがアナキズムではないかなどといっている。）

そうした頑固な民族性が結局、中国の近代化を遅らせてしまったといえよう。だが極端に過ぎるとはいえ、章炳麟のような西欧近代批判は驚くべき見透しを持っていたともいえる。時に単純粗雑、牽強付会であるといえども、単純粗雑だからこそいつそう実践的であり、牽強付会だから余計確信的であったともいえる。同じものが裏にも表にも働く。その結果現在の中国をつくりあげているのであるが、ここでも民族主義対アナキズムという、清末アナキスト知識人たちのとった奇妙な枠組は依然として存在しているのである。

劉夫妻の日本でのアナキズム活動は、僅々二年くらいに過ぎなかったが、「天義報」の他に「衡報」という雑誌も発行して、同国留学生たちに与える影響は大きかった。言うところの理論はアナキズムの一般であるが、他の同志の誰よりも伝統に密着した古典学者であったから、同国人に対して説得力があったのである。しかし帰国してからは妻の何震が王公権暗殺計画に惹き込まれたのを救うために、同志を裏切り、自己の経歴に終止符を打った。

東京・アナキストのもう一人の主導者張継は一九〇七年末、社会主義者に対する警察の圧力が強くなってきたので、日本を離れてフランスに渡った。フランスではバリのアナキスト・グループに加わり、つづけて活動を行なった。当時パリには李石曾・吳稚暉らの著名アナキストがいて、活発に宣伝、運動を展開していたのである。

(2) フランス在住アナキスト——半勞半學運動——

日本・アナキストが劉師培を代表として、古典的、民族的、実践的であったのに対し、フランス・アナキストは李石曾を代表として、自然科学的、国際的、教養的だったといえようか——。同じアナキストとはいえ、自らニュアンスが異なっていた。

概して日本・アナキストは泥くさく、フランス・アナキストはスマートな雰囲気を持っていた。スカラピーノによると、李石曾は台湾でも、ベレー帽にやぎひげをつけ、フランス風のマナーを完全に身につけていたといわれる（一九七三年死去）。それだけに同じく暗殺は主張しても、強烈な実践者は遂に現われなかった。しかしその代り、アナキズムの宣伝普及の面で、また社会的運動の面で、日本・アナキストの比較にならない大きな足跡を残したのである。

宣伝の中心は李石曾・張静江・褚民誼・吳稚暉の四人が一九〇七年六月に発行した、週刊「新世紀」であった。この雑誌以前にもアナキズム誌はないわけではないが、長くつづかず、「新世紀」はその後三年も続刊されることで、世界中いたるところの中国人の間に大きな影響力を持ったのである。李石曾の父は内閣で権勢振った著名な実力者であったし、張静江の家は富裕な実業家の一族であったので、大きな政治力と莫大な資金を拠出することが可能だったのである。

「新世紀」が主張するアナキズムは、根本原理において、「天義報」と格別変っていたわけではないが、それでも前記のような差は現われていた。結果として彼らは民族や家や伝統といった、類概念の激しい反抗者だったということができよう。もともとアナキズムにあつては、個別論と一般論はじかにつながっていて、中間段階としての特殊論は否定されがちであるが、フランス・アナキストはそこにいつそう力点を置いていた。なぜなら中国では、まさにそうした民族や家族や宗族において抑圧されており、若い自然科学者が反抗するのは当然だった。

伝統を批判するにしても徹底していて、新来の吸収の仕方、伝統的な中国知識人のやり方そのものにも批判を加えていた。褚民誼は「帝國主義が膨張すると、ジンギスカンは東亜のナポレオンであるという。復仇主義が盛んになると朱元璋は中国の真徳であるという。……革命の

風潮が拡がると、洪秀金は失敗したガリバルディであるという。キリスト教が流行すると、孔子がその教主だという」(「新世紀」)。同様に無政府主義が盛んになると、老子がその創始者であり、共產を井田法ではないかと考えるのは、時代を知らない復古主義であるという。「かくて彼らは古人の奴隷にされてきた。」これは同じアナキズムでも日本ふうアナキストへの、痛烈な批判にもなっていたのである。

このような強烈な反伝統が、直ちに反儒教・反家族とつながってゆくのは当然であろう。そして一方では更に反エリート、反享樂と短絡してゆくところに興味ある問題があるが、彼らが實際運動に影響を及ぼしたのは、むしろそうした特殊論否定の特殊論であるよりは、当時流行の相互扶助説であった。クロボトキンの『相互扶助論』は一九〇二年刊。李・張が渡仏したのは一九〇二年、到着早々に彼らがこの書に接して、とらえられたことは疑いないのである。これに当時の中国では、ラマルクやダーウィンの社会進化論が非常に普及していたから、その反対説としての相互扶助説(人間の生存は闘争によるよりも、より互いの協力において成り立ってきたとする説)は、大きな衝撃であった。(スカラビーノは、『扶助論』は彼らの「バイブル」であったとしている。)

『扶助論』の影響を受けてフランスでは、一九〇二年から八年にかけて、無政府組合主義が

最高潮に盛り上がっていた。

一九〇二年、張静江は渡仏するやすぐに自分の金で、パリに「通運公司」を設立し、中国ふう喫茶館を開かせ、数多くの中国人留学生に働き口を与えているが、これはやはり扶助説の実践とみていいだろう。アナキズムの自立自存の思想は終局的には、生命保持の「農」を基本とするが、都市ではさまざまな企業活動となって現われる。（今、日本でも、アナキスト系青年たちは「××コミュニケーション」などと称して、一つ財布の共同生活を行ったりしている。）例えばパリでは、張の財力に頼って印刷所を興し、豆腐工場を設立した。印刷所では自分たちの文章を印刷し、豆腐工場では中国豆腐と各種の大豆加工品をつくって、パリジャン・パリジェンヌに喰わしてやったのである。

一九二〇年上海にいた毛沢東は、楚怡小学の校長に当たった手紙に、洗濯屋をやって暮しをたてていると書いているが、これもその以前にアナキスト学生たちがやっていたことである。（その他料理店・手細工・行商もやっていた。）このように後からみると著名となった人物のユニークな、あるいは創造的な仕事とされていることも、当時の社会に照してみると、すでに先駆者があって単に模倣であったり、追隨であつたりすることが少なくないのである。毛沢東が青年時代、大いに力を入れたとされ、現代の中国教育の原型運動とされている、渡仏・勤工

儉学運動においても同じことがいえる。この運動は、どの毛沢東伝をみても、毛が積極的に推し進めた記述があるばかりだが、創始者は、フランス・アナキストの連中であつた。

彼らがフランスでの教育を主張した理由は、宗教と君主制が分離していたこと、教育費が比較的安くつくこと、学問は広く独創的であることなどが挙げられていて、特にアナキズムが意識されていたわけではなく、明らかにそれは企業活動の延長するところにあつた。数年間の実績の下に、正式に促進する組織として「留法^{フランス}儉学会」がつくられたのは、一九一二年である。設立者は、呉稚暉・汪精衛・李石曾・張静江・褚民誼・張繼・^{オチノエ}濟竺^{シヤン}一山。全員アナキストと目されている人々であるが、ただしそこには役員はおらず、必要な経費以外は納入金などまったくとらなかった。

「留法儉学会」によって（一九一三年の第二革命までに）、フランスへほぼ百人、イギリスへ約二十人の学生が送られた。やがて第一次欧州大戦によって中断されたものの、フランスは戦争の長期化から人手不足に悩み、数万の苦力を受け入れたのに乗じて、再び留學運動が盛り上がり上ってきた。一九一五年、かつてのグループとその支持者は、新しい結社「勤工儉学会」を組織した。以前の結社と違うところは、ハッキリ「工読運動」（働きながら学ぶ）とされていたことである。以前は必ずしも働かなくともよかった。これと並んで、アナ系の教育学者であ

る蔡元培を会長とし、李石曾が幹事となつて、「華法教育会」が設立された。この会は国内外において、学生の実生活上の色々の悩みを、解決するためにつくられたものである。

一九一七年までに工読運動は、中国の多くの省に広がっていった。広範な学生たちが、働きながら学べる海外留学に希望をかけ、胸をはずませていたのである。（翌年一九一八年七月十九日、北京へやって来た応募学生の中にまじつて、毛沢東という青年がいた。彼は友人をフランスへ送るために八方奔走して世話をしていたが、自分は行かなかった。）こうして一九一九年から二〇年にかけて、全国各地から千六百人も青年が渡仏したのである。そのうち湖南が一番多くて数百人いた。

この勤工儉学運動の評価であるが、それは確かにアナキズムとは、ほんの少ししか関わりあつていなかったかもしれない。しかしその運動に伴う活動事務は沢山あつたし、後期には運動の推進者にマルクス主義者が現われてきて、歴史の流れとしてみればアナとボルの結節点をなしていたのである。一九二一年、勤工儉学でフランスにきていた周恩來・王若飛らは社会主義青年団を結成した。団には湖南出身の蔡和森・李富春・李維漢・李立三・蔡暢・向警予らが積極的に参加し、運動を拡大しようとした。そのために華法教育会や勤工儉学学生の中のアナキストは、彼らと争わねばならなかった。吳稚暉のリュオン中仏大学でも争いが行なわれた。次

第に時代の思潮は移り変わりつつあつたのである。

(3) 国内・アナキスト——モラルの結社——

アナキズム運動は国外の留學生の間に始まり、留學生が帰国し、「新世紀」等のアナ雑誌も少数数ずつでも国内へ持ち込まれるにつれて、中国内部でも次第にアナ運動が現われるようになった。その国内・アナの代表的人物は劉師復^{リウウシフ}である。劉師復は時折劉師培と混同されることがあるが、全く別人で、辛亥革命（一九一一年）後間もなく「新世紀」と連絡をつけて、五四以前のアナキズム運動の本流を形づくった人として知られている。

一八八四年広東の近くに生まれた師復は、他のメンバー同様に優れた古典学徒として成長したが、出国以前にすでに革命的傾向を示していて、日本へ渡るや（一九〇四年）、孫文の同盟会の結成に積極的に参加している。一九〇六年、孫文が広東で武装蜂起を企てていると聞いて帰国するや、支援の意味で大官暗殺をひき受けて捕われた。獄には三年あまりいて、文章が実にくまうまいというただそれだけの理由で、地方官吏の嘆願によって釈放されるのであるが、この獄中から出獄にかけて、彼は確実にアナキズムへ移行していった。

出獄後は再び香港に戻って、アナキズムのために挺身した。今度は同盟会とは関係なしに、暗殺団を組織し、摂政王載灃^{チャイワン}の暗殺を計画したり、革命後は別の目標として袁世凱を抹^ぬきだりしていた。しかしやがて(一九二二年)同志と広東に「晦鳴学舎」を設立するに及んで、テロリズムの道を捨て、大衆レベルでのアナキズムの宣伝活動に従うことになった。以後死(一九一五年三月)に至る三年余が彼の活躍期であるが、この間文字通り献身的につくした。

「晦鳴学舎」では機関誌「晦鳴録」(のち「民声周刊」と改名)を発行し、新世紀社の刊行物を複製し、クロボトキンの理論とエスベラントの宣伝を兼ねた『無政府主義粹言』を刊行した。一九一三年、袁世凱の弾圧にあつて「晦鳴学舎」は閉鎖、同時に「民声」も発禁となった。それで師復は組織をアモイに移したが、ここでも弾圧にあい、十四年には上海に逃れて地下出版として「民声」を続刊した。七月、無政府共産主義「同志社」を組織、八月には上海の漆業職人がストに入ると、直ちにパンフをつくり、革命的サンジカリズムの普及に努めた。労働運動の中におけるアナキズムの実践に乗りだしたのである(雑誌「工人宝鑑」を発行する)。しかしそれも束の間、翌年三月には上海で肺患に倒れてしまうのである。この間時間的に短気といえ、師復は大きな仕事を成し遂げた。それは確実に「五四」へつなぐものとしての準備であつた。広州では彼の指導によって、理髪職人組合や茶館使用人組合が結成された。

そしてそこで彼の薫陶を受けた青年たちは、ビルマ、ジャヴァ、シンガポールの地域に散らばっていった。多くは華僑学校の教員となつて、広東籍の印刷工・洋服職人・旅館使用人などの組合づくりに奔走したのである。中でも中国共産主義との関係で注目されねばならないのは、そのモラリスティックな態度である。師復の厳格なモラリズムは、そのまま中国共産主義に流れ込んでいったのである。

例えば毛沢東は、『中国の赤い星』の中で、自分の当時の崇高な理想を述べるのに、「私の仲間は日常生活のあたり前のことを話すのも拒否しました。私は一度ある青年の家に行っていた時、その男が肉を少し買おうと私に話し、私の面前で召使いを呼んでそのことを彼と相談し、一片買って来いと命じたことを思い出します。私は当惑して、再びこの男と逢いませんでした」といっているが、誰しも毛のスティック振りには感心させられよう。しかしこれにも先駆者の例があるので、毛のこの発言もそれと関係ある筈である。

師復は「晦鳴学舎」を設立すると同時に、アナキズムの準備組織として「心社」を結成しているが、この「心社」では十二ヶ条の誓約を設けて、その第一項に「肉を喰わない」を掲げていた。(1)肉を喰わない (2)酒をのまない (3)煙草を吸わない (4)下男下女を使わない (5)輜^{かこ}や人力者に乗らない (6)結婚しない (7)姓名を使わない (8)官吏とならない (9)議員とならない

(40) 政党に入らない (41) 陸海軍の軍人とならない (42) 宗教を奉じない——。

この中、(8)(9)(40)(41)はアナキズムの原則から引出されるものであるが、(1)(2)(3)(4)(5)の生活規範は中国独自の土壌と結びついている。(それを遡れば太平天国に至り、さらに遡れば古代徳治思想に至る。)(7)の「姓名を名乗らない」は、姓は家を表わすものであるという理由で反対していたのである。

ただしこの「心社」にはさらにそれ以前に、モデルがある。呉稚暉・李石曾・張繼・汪精衛の「進徳会」(一九二二年一月)である。パリ・アナキストの大部分は辛亥革命後に帰国するが、彼らは在パリ中から反宗教・反伝統・反民族等に加えて、反享楽を掲げ、厳しい戒律の下に生活していた。全体にスパルタ式の生活で、アナキズムの半面に伴う享楽や退廃とは、まるで異なる毎日を送っていたのである。肉体の鍛練は盛んに奨励され、李石曾などはエリゼ・ルクリュに習って菜食主義を実行していた。そうしたパリでの生活様式が、もっと強化されて本国に持ち込まれたのである。

周知のようにアナキズムは、直接行動論であり、マルクス主義のような段階論をとることをいやがる。段階論は常に妥協を意味するので、結果として目的論にすり変えられてしまう危険性を内包しているからである。必要なことは瞬時にして現在に実現されねばならない。未来を

先取りして今に生きるものが、アナキストである。人間性においても同様で、アナキストは新しい社会に伴う新しい道徳を自ら実践してゆかねばならない。

アナキズムに触発された運動らしく、「進徳会」には役員も章程も会費も罰則もなかった。新しく会員になるものは会員に紹介されるだけで登録され、会員が規約を犯しても、他の会員は帽子を脱いで遺憾の意を表し、丁重に懇請するだけだったといわれる。会員は五種にわかれ、それぞれのレベルに応じて誓約事項が次第に厳しいものに決められていた。「賛成員」「普通会員」は荒淫・賭博・蓄妾をしないことを誓約させられた。それが清朝体制腐敗の最も普遍的な形と考えられていたからである。「特別会員」(さらに甲・乙・丙という級がある)は以上の条項に、官吏・議員にならない、煙草・酒・肉食をしないが追加されていた。

そして問題はその会員に対する規制力であるが、相当に強いものであったことが幾つかの実例によって伺われる。「民立報」によれば、孫文と袁世凱とともに汪精衛が内閣総理になることに賛成であったが、汪は「進徳会」の「特別乙部会員」(官吏と議員にならない)であったために辞退したということである。また同誌には王子元(ワンジユン)という人物が、「特別丙部会員」であるために省の教育担当を断わった例が出ている。それで省の方では王の資格を一時的に「一般会員」に戻し、仕事が終って再び「特別会員」に復すことを要請しているが、にべもなく拒絶さ

れた。このように「進徳会」は、当時の政界の最高指導部までも揺がす大きな力を持っていたのである。

こうした進徳会会員の政治不参加に対して、スカラピーノは、「辛亥革命以後国民党の熱情が急速に冷めていったことに対して、ある程度まで責任を負わねばならない」（『中国のアナキズム運動』）と暗に批判を加えている。革命政権が未だ不安定な時期のアナキストの純粋性は、スペイン革命においてと同じように、確かに結果的には反動勢力を助ける危険性を孕んでいる。しかし条件説による妥協がたいがい墮落を意味することも事実であり、その意味では進徳会「特別内務会員」のような存在は貴重であった。なかんずくモラルの結晶のような師復の生き方は他の模範であり、運動としての先輩はバリ・グループであっても、後輩は先輩以上に厳しい態度をとっていたのである。

師復はアナキストの長老である張継が議員となり、さらに一九一三年民国の参議院議長となるに及んで、直ちに規約違反であると呉稚暉に手紙で迫っている。（これに対して呉は違反ではないと弁護している。）このように師復の純粋性は徹底していて、他のアナキストも、社会主義者と認めている孫文や江亢虎（チンカンフー）をも、社会改良家以上には認めようとしなかった。孫は根っからの政治革命家であり、江は救いようもなく混乱している。無政府共産主義を擁護する

棄無（アノフ） 憤憤（アノフ）の「純粹社会党」についても認めず、無政府社会に無政府党など存在しないのだと厳しく批判していた。

(4) 五四運動の主軸

師復が逝くと、中国アナキズムの運動は急速に衰えていった。後の呉稚暉の回想によると、「師復の死後、中国無政府党はまったく寥落してしまった。まるで肺疾による師復の死が、中国無政府党を同じ病にかからせたかのようである」と書いている。それほど生前における師復の主導力は大きかったのである。しかし師復の他にも数多くの著名アナキストがいたし、教え子である劉彼岸、莫紀彰、林君復ら数多くの青年活動家たちがいたので、運動の努力はなお続けられた。そして全国的規模で、アナキズムの影響力が最高に盛り上がったのは、むしろその四年後においてだったのである。

一九一九年、言うまでもなくこの年は、五四運動の年である。この年の四月、ヴェルサイユ講和会議によって、日本に対し山東省の旧ドイツ利権を与えたことは、国民のあらゆる層の激しい民族的怒りを誘った。もともと五四新文化運動の深化から、軍閥支配反対の気運が醸成さ

れているところへ持ってきて、北京政府の売国政策がいよいよ露骨になったので、一時に民衆の憤懣が爆発したのである。この先頭に立ったのが北京を中心とする全国数十万の学生であり、彼らは口々に、「条約調印を拒否せよ。」「山東を奪回せよ。」「二十一ヶ条を葬れ。」「日本商品をボイコットせよ。」を称えて、街頭に躍り出た（六三運動）。商人・労働者はこの学生の呼びかけに応じて、全国各地で罷市・罷工を行ない、その結果遂に北京政府は交渉の当事者を罷免せざるを得ず、平和条約調印を拒否するに至ったのである。

五四運動は中国で初めての自覚的民衆運動であるが、毛沢東はこれを、「五四運動はそのはじめのうち、共產主義的知識人、革命的小ブルジョア知識人およびブルジョア知識人の三つの部分からなる統一戦線の革命運動であった」（『新民主主義論』）としている。まるで三者が同一線上の力において、活動したかのような印象を与えている。これを受けてさらに、五四運動は初歩的共產主義者が指導したかのような印象を与中国研究家も現われるのであるが、史実的には正確ではない。丸山松幸によれば、「李大釗を中心として、ロシア革命に共鳴しマルクス主義に接しつつあった若い知識人のグループが存在していたことは事実である。しかし運動の中で彼らが組織的に行動したという事実は見当らない。組織的に最も強力な指導力を発揮したのは、むしろアナキストのグループであった。」（『五四運動』）

そもそも五四運動は「五四事件」において火ぶたが切られたのであるが、この事件を企図したのは高等師範学校のアナキスト団体「工学会」である。工学会のメンバーは「革命の声、寂として聞ゆるなき」現状を打破するには「直接行動」以外にはないと、曹汝霖（交渉の時の中国側代表）ら三人の住居を確かめるや、死を決して彼らを襲うことを決定した。五四当日、学生デモ隊が結局各国公使に陳情書を渡すことだけに終りそうにみえた時、誰からともなく、「曹汝霖の家に行こう」と声がかかった。デモ隊の指揮者は極力それを止めようとしたが、もはや不可能で、警官があっけにとられている間に、屋内の器物が破壊され、家に火がつけられ、丁度居あわせた章宗祥（元駐日大使）がめった打ちにされた。かくして五四の突破口が開かれたのである。

「工学会」はその後もしばしば五四運動の舞台裏にあって、推進的な役割を果たすが、五四運動までに流れ込んで来ているアナキストの連合集団としては別に「進化社」というのがあった。「進化社」は、北京大学の黄凌霜・区声白・太侔の「実社」（一九一七年五月設立、不定期刊「自由録」発行）、南京の「群社」（「人群」発行）、太原の「平社」（「太平」発行）、上海で呉稚暉が刊行していた日刊「労働」（中国に初めてメーデーを紹介した）などアナキストの諸団体が、一九一八年までにみな閉鎖させられたところから、翌年一月に合併して生れた団体であった。

月刊「進化」を発行し（その三号では「劉師復記念号」としている）、五四運動の嵐の中でまたまた発禁の運命に出会っているのである。

かくして五四運動以前には共産党はなく、したがって民衆に接触する唯一の革命団体としてのアナキストの連合体が、五四運動において重要な役割を果たすのは当然のことであった。北京大学は学生運動の中心的存在となるが、ここにおいてもアナキストは主導的役割を果たしていた。当時北京大学には三つの派があったといわれる。その第一は陳独秀・胡適・李大釗の新青年派、第二は辜鴻銘・劉師培・黃侃らの国故派、第三が李石曾・吳稚暉・蔡元培校長らのアナキズム派である。ただしこのうち国故派は保守的で政治を語らず、新青年派は胡と李との間に意見の不一致があった。一番まとまって著名な人物がいたのは、アナキズム派であった。そこから彼らの指導を受けた黄・区のような、アナキスト学生が数多く生れたのである。したがって湖南からやって来た田舎青年毛沢東のような人が、忽ちアナキストに感染したのも、必然的なことであつたとせねばならない。

アナキスト学生は五四運動以後も引続き、五四運動の間に提唱された問題の解決のために努力した。理論的方面では、北京大学の学生会の「北京大学学生周刊」（一九二〇年一月刊）、同じ大学に五四以後新たに生れたアナキストの小団体「奮闘社」の機関誌「奮闘」（同前）、杭州の

省立第一師範、第一中学などの学生が編集していた「浙江新潮」（一九一九年十月刊）などに拠って、社会変革のヴィジョンを積極的に打ち出した。五四運動の提起した反帝反封建の問題は、必然的に社会変革のための社会主義思想と結びつき、学生間にさまざまな論議を呼び起していたのである。右のうち「北京大学学生周刊」は、初めは一党一派に偏しない学生全体の協同機関誌であつたが、一九二〇年二月、再び学生運動が盛り上がりつつあるや、次第にアナの論調をとり始めた。（編集部には黃凌霜・陳友琴・黃天俊らのアナキストが加わっていた）。

その十七号では「アナキズム革命の意義」と題して、「労働者を革命の原動力とし、その直接行動によって、一切の生産手段、田地、礦山、工場、機械などを社会の公有に帰せしめ、私有財産制度を廃棄する」と述べて、明らかにアナルコ・サンジカリズムの立場を表明しているのである。

そうした理論的討議の中でアナキスト学生達は、実践に向かっていた。その典型的なものが、北京大学生を中心とする「工読互助」の運動である。彼らは社会の階級的矛盾の発生因は、筋肉労働と精神労働の分離にあるとしていた。それを統合する場所として、印刷工場・料理店・洗濯屋（その他手細工や行商）をつくり、自分らで集団自活生活を開始したのである。それはとりわけその頃中国でもはやされていた、武者小路実篤の「新しき村」の模倣でもあ

ったのである。だがこの学生達の真剣ではあるが、多分に世間知らずの商法は間もなくゆきづまり、失敗に終わった。

そうした反省もあって呼びかけられたのが、「資本家の支配する生産機関へ入り込め！」であった。互助団の発起人であった施存統や、マルクス主義支持の戴季陶も同じ意見であった。そこから真面目なアナキストである黄愛のような分子が、労働者の中へサンジカリズムの運動に飛び込んでゆくのである。一九二〇年六月湖南に帰った黄は、同僚の龐人銓と共に長沙に「湖南劳工会」をつくった。劳工会の最初のメンバーは母校の学生達であったが、次第に労働者や職人を巻き込み、翌年暮には四、五千人を擁したといわれる。これは恐らくアナキストのつくった労働団体のうちでは、最大の規模のものであろう。

この劳工会の発展に、同じ地に活躍する毛沢東は、相当やきもきしたようである。（毛と龐は同郷で家も余り離れていなかった。）劳工会の連中は、たえず「マルクス主義者はしつぽをはやしている。政府を必要とする以上、それは軍閥と大差ない」と批判していたのである。しかし毛の方は黄・龐兩人の誠実で勇敢な人柄に魅かれていたし、黄・龐の方も毛の現実的な提案に感服していたので、互いに裏面で連絡しあっていた。一九二二年一月黄・龐は、第一紡績工場のストを指導して殺害されるのであるが、その直前、二人は毛の説得により社会主義青年

団に加盟していたといわれる。

(5) その後の変転

黄・龐兩人の死後もアナキズムの運動はなかったわけではない。劳工会だけに限ってみても、会的首脳部は閉鎖以後上海・天津・漢口等に逃れて活動をつづけたし、後に述べるようにかなりの規模の民団訓練も行なわれていたのである。しかし総体として黄・龐の死は、師復と同様に中国アナキズムの運動に、さらに区切りをつけることになる。共産党（一九二二年七月創立）の急速なる抬頭が、反比例的にアナキズムを凋落に追いやっていったのである。そこから国民党とアナキストの接近が生れるのであるが、運動は事実上消滅していった。一九二七年、蔣介石の四・一二クーデターによる共産党の壊滅的打撃は、同時にアナキズム派運動の終止符でもあったのである。

とすると中国におけるアナキズム運動は、李石曾らの渡仏（一九〇二年）以来二十五、六年間（実質的には十数年間か）が最盛期ということになる。世界的にみても一九世紀から二十世紀にかけてはアン・リネル、ランダウアー、ウォーリン、大杉栄、ソレル、マフノ、クロボト

キン、ルクリュ、ギョーム、チエルケゾフ等数々の著名アナキストが運動を呼び起した時期である。中国の特殊事情としては、辛亥革命以後の政治への不信感が濃かったため、アナキズムは容易に民衆の中へ喰い入っていった。辛亥革命にはそれなりに多くの人々が「新世」として期待をかけた。それが袁世凱・段祺瑞と受けつがれる軍閥政府の下で、期待が裏切られたのである。

それだけに次代を背負う共産党への影響力は大きかった。すでにみた如く今日中国共産党の特異性とされているモラルの高さや、半労半学（ハーフ・ワーク・ハーフ・スタディ）の教育制度、あるいは肉体訓練や世界語の尊重といった点に至るまで、共産党成立以前のアナキズムとの関連性なしには考えられないのである。その意味では毛沢東がその典型であるように、中国共産党はそれ自体においてアナキストを吸収したというよりも、アナキズムの転身において現在あるのである。体質的にはアナキズムを抱えているといいいい。（毛が黄・龐らに積極的に協力し、好意的に説得をつづけた心理的理由がそこにある。）中国共産党が他の国の共産党とひどく異なってみえるのも、そのせいである。

それをいいかえると中国共産党は、アナキズムの反省と批判において自己をつくりあげたということにもなる。李銳『毛沢東その青年時代』によると、毛沢東は黄・龐の労工会に対して

次のようにいったといわれる。「経済闘争にだけ熱中し、厳格な組織をつくらず、遠大な政治目的をもたぬ彼らの運動方針を批判した。爆弾と小銃で政府を一掃しようというおろかなアナキズムを批判し、労働組合だけを論じてマルクス主義を研究しない態度を批判した。」スノーにも「わたしたちは……話しあいによって、彼らの性急で、無用な、多くの活動をおさえた」と語っている。

右のうち「爆弾と小銃」の件は、自ら後に「政権は銃口から生れる」ということになるし、アナキズムへの批判は、そのまま自己の主張の偏向性を裏書きしていることにもなるのだが、批判されている限りにおいて正当性を得ているのである。ことにここには表わされていないが、アナキストの自然発生信仰と民族主義の軽視は、自己を凋落に導く大きな要因をなしたと思われる。人は本性的に半面において怠惰なものであるし、近代の如何なる国の改革も民族ぬきにしてはあり得なかった。アナキズムはそうした人間の本性観および現実の類的思考において問題を有しているのである。

景梅九は自分の体験上からアナキズム凋落の原因を、次のようにいっている。

①種族革命宣伝や書籍・新聞が多く、各地の運動は種族革命を媒介としたため、他の問題は自然顧みられなかったこと。

②知識階級は共和の二字に酔わされ、専制政治を倒して民主主義が実行されれば事足りりとしたこと。

③友人のアナキスト佩蘭・仲伏・博泉等はみな遠くにいて、一人ぼっちで何も出来なかったこと。その他日本の同志が失敗して、海外の消息が絶えたことも重大な原因の一つだった。

これにつづいて、景は、「だが私は心の底ではまだ主義をすっかり忘れたことがなかったから、日本政府が幸徳秋水ら二十余人の同志を死刑に処したので、その機に乗じて無政府主義の五文字を「国風」（自分の新聞）に見出しとし、時事評論をし、大いに宣伝したのだった」（『留日回顧』）と述べている。景はアナキズム活動を離れてからでもそのように感じ、他人のちょっとした無政府的言辭にも敏感に反応していたのである。これは重要なことである。

つまりもとアナキズムの傾向というものは、人間の体質的なものと非常に関りあいが深いのである。むろんイズムとしてのアナキズムはあるが、それ以前に当人のパーソナリティと密接に関係する。その意味ではアナキズムには「転向し得ないもの」という内実が含まれており、仮面としてマルクス主義をとろうが三民主義をとろうが、アナキストはアナキストということがある。一所不定の流動体としてのアナキズムは、半面容易に他に変転し得る可能性を構造として持つ。あたかもニヒリズムがそれ自身において固定的に存立し得るものではなく、何

ものかに移行する過渡的存在でしかあり得ぬように、アナキズムもまた絶えず転向性を内包している。

そうしたアナキズムの持つ構造的な一般性を念頭において、アナキストの行方を眺めてみると、その変化の多様性と一貫性において、実によくわかるのである。アナキズムの最盛期の後、ある者は共産党入りし、ある者は国民党入りをし、ある者は女中を雇い、議員になり、ある者は酒に溺れ、阿片吸飲者となる。むろん現在の中共和政権下にあつてなお依然として、同じ姿勢を保ちつづけている者もある。そうした中で注目しておきたいのは、李石曾初め国民党入りしたアナキストである。

アナキストがこの党であろうと、入党すること自体許されることではないが、これには歴史的にも、心理的にも、理解されねばならぬ点がある。国民党とアナキストとの結びつきは古く、孫文時代に遡らねばならぬことになり、たんに思想的にみるならば、孫文とバリ・アナキストは鋭く衝突せざるを得ない筈のものが、主として孫文の大らかな性格から彼らの間には温かい友情が生れていた。両者は主義を超えて結びあい、孫文は彼らの大多数を「同盟会」に加盟させ、ついで呉稚暉・李石曾らがつぎつぎと国民党入りした。

国民党に加入する一つの理由は、孫文の三民主義がアナキズム到達のための初歩的ステップ

と考えられたからである。景梅九なども三民主義の中の「民生主義」は、アナキズムと同趣旨と考えていたようである。ことに黄・龐死後はアナキストの間で「国民党に加入しよう」の聲が高くなった。もつとも孫文時代には、共産党の方も同党加入戦術をとっていた。

心理的にもというのは、対共産党の関係である。アナキストの全体主義と中央集権主義嫌いは、当然のこと共産党と衝突する。ことに達成されたロシア革命への失望感、決定的にアナキストを反ボルシェヴィキに追いやってしまったのである。ロシアにおけるアナ・ボル提携の時間はほんの束の間であった。クロンシュタットにおいて、マフノ運動において、アナキズム派は徹底的に打ちのめされてしまったのである。かの共産党の宗教的一枚岩思想は、毛筋ほどの異端思想さえも自家中に存在を許さない。それに較べれば国民党は右派といえども、反共の一点でアナの存在を認め、むしろ積極的提携に向かおうとしていた。アナキストとして純粹であればあるほど、むしろ国民党最右派に近づいてゆく。李石曾は二十数年間国民党中央監察委員を勤め、呉稚暉・張静江も同委員を勤めたことがあるのである。

こうしたアナキスト達の心理であるが、依然として何がしかのアナキスト意識があるものと推測される。ある訪問者によると、台湾政府の高官にアナキストがいて、彼は同じアナキストでも、監察委員のメンバーは何もしていないが、少なくとも私は高官として何事かを果すこと

が出来る、と語っていたそうである。一方批判されている当人の、例えば李石曾は、一九三七年、日本から訪れたアナキスト岩佐太郎を明瞭にアナキストの意識をもって迎えている。その時二人の間に入って通訳を勤めたのは政府の大官張継であるが、彼が無政府の実現に否定的な言葉を吐いたのに対し、李は叱責の口調で次のように答えていたという。

「張継君、君は政治家だ、大政治家としてハハハと腹を抱えて笑っておればそれでいい。それでも君はかつて無政府主義者と自任していた時があった筈だ。今君は無政府主義は五千年かかっても実現されないといったが、人間の生活の九分九厘、千中九百九十九は政府に関わりなしに営まれている。現にこの会合をみるもどこに権力があるか、政治があるか。ただあるのは、我々の頭の中にかつてから教えられている権力や政府のことがこびりついているに過ぎない。二時間も三時間もの間和やかな無政府の生活しかないではないか。五千年たたないでも現に今この部屋の内、ここに実現されているのだ。」

ともあれアナキズムとアナキストとは異なっている。アナキストが如何に変転しようと、アナキズムの眞理性は、つねに権力志向政治に最大の刺激をもたらすのである。